

「豊作を祈って」

大原中学校

二年

伊藤

蒼生

あと十分、炊飯器の前でご飯が炊けるのを
まだかまだかとじつと待っていた。今日はカ
ツ井のもうカツの玉子とじの煮えた甘辛い
い匂いがしているのに、ご飯がまだ炊けてい
ない。あと十分と炊飯器の画面に表示された。
こんなに十分が長く感じることはない。英語
の授業の最後の十分と同じくらい長く感じる。
何度も時計をみてまだかまだかと思う。その

時の感覚に似ているのだ。炊飯器の画面が、
「1」を表示した。あと一分、この一分がま
た長い。柔道の乱取りのラスト一分と同じく
らい長く感じる。息を切らして、もう少し、
もう少しと必死になっている時の感じた。部
活後の僕の腹は、もう我慢ができないくらい
ぺこぺこに減っているのだ。「ピピピ」と
ようやくご飯が炊けた。炊飯器のふたを開け
るとご飯の炊けたいい匂いが湯気と一緒にた
ち込める。早く早くと急いでご飯をよそって

その上に具を乗せる。「旨そう。じっくりとばを飲む。」「いただきます。を言うと同時に口にかき込む。」「旨。」「はしがとまらない。僕の腹は満たされていった。

僕は、ご飯が大好きだ。ご飯のない生活は考えたことがないが、多分無理だと思う。ご飯は、肉、魚、卵、その他の料理にも何にでも合う。カツ丼、親子丼、天丼、海鮮丼、丼ぶり飯も、めっちゃくちゃ旨い。でも僕は、その中でもおにぎりが一番好きかもしれない。

部活とその後に行う、柔道の稽古の間には食べるおにぎりは最高に旨い。しつとりとしたのりと塩味がご飯をまたおいしくさせる。空腹を満たすだけでなく、パワーの源ともなる。

そんな大好きなご飯と同じくらい、僕を夢中にするものがある。大原はだが繁りした。毎年、九月二十三日、二十四日の二日間、大原の十八社の神社で行われる。一年の中でこの日を一番楽しみにしているといってもおかしくない。幼い頃からずっとならしてきている。

祭り当日の朝、みこしをおたすきできれいに
かざりつける。僕の気分もどんだん上がって
くる。そして、は上げに稲穂をくわえさせた
ほうおうをみこしのてっぺんのおりむりの上
にとりつける。これから祭りが始まるぞ、と
わくわくすると同時に、少し引き締まった気
持ちもわいてくる。毎年、米の豊作を祈って
又、感謝して、ほうおうの口ばしに稲穂をく
わえさせるそうだと。はだか祭りは、五穀豊稔
大漁を祈願して、江戸時代の昔からずっと続

いてりる。そしてその祭りに、花をそえてい
るのが祭り唄だ。昔から代々受け継がれ、子
供から年寄りまでみんなで歌い、はやして祭
りを盛り上げるのだ。祭唄の中にこんな歌詩
の唄がある。

「米のなる木でわらじをつくり、踏めば小判
の跡がつく」

「今年は豊年穂に穂が咲いて、道の川草に米
かなる」

「そろそろそろ、たよ、踊り子そろそろ、た、稲

の出穂よりなおりろったしなと、豊作を祈る
唄、豊作を祝う唄がまたまたたくさんある。
大原はだが繁りは、この何年か、新型コロナ
ウイルス感染予防のため中止、縮小されてい
た。久し振りの繁りがいよいよ来月行われる
今から町の奥が熱くなる。今までは、ただた
だ楽しいだけの繁りだったが、今年の繁りは
少し違う。今まであたり前のように毎日食べ
ていたご飯。農家の方々や色々なことに感謝
して参加しようと思う。今年もみこしのほう

あうの口ばに稲穂がくわえられるのを祈って。